

東鳴子温泉活性化に向けて
都会の若者からの提言

多摩大学 インターゼミ（社会工学研究会）

東鳴子温泉活性化プロジェクトチーム

阿部剛平 宮城和也 山本信子 石川健太

2010年1月9日

目次 P2

序論 P3

第1章 現代の湯治における「温泉」について (P4~P7)

- 第1項 湯治の歴史、温泉の生成方法などについて
- 第2項 湯治を行う事による心身への影響について
- 第3項 東鳴子温泉とはどのような温泉地か
- 第4項 東鳴子温泉の良いところ、悪いところについて

第2章 現代の湯治における「観光」について (P8~P15)

- 第1項 客足激減の要因 —温泉の観光化と湯治—
- 第2項 地域振興の動き —人の垣根を外す地域づくりへ—
- 第3項 具体的な施策 —イベントでの湯治場拡大—
- 第4項 温泉以外の観光資源
- 第5項 他温泉地の地域づくり —地域づくりの根幹は住民の心—
- 第6項 課題の考察 —イベントからの脱却—

第3章 現代の湯治における「地域と農業」について (P16~P19)

- 第1項 鳴子地域の人口と産業 —低迷をたどる今—
- 第2項 地域連携 —東鳴子ゆめ会議—
- 第3項 農業 —グリーンツーリズムの可能性—

第4章 フィールドワークの所感 (P20~P24)

第5章 提言—「湯治」に対するパラダイムシフト— (P25~P31)

「現代の湯治をより普及させる提言」

「医療湯治」

「温泉地と大学の連携」

引証資料 (P32~P33)

祝辞 (P34)

2009年12月26日 最終プレゼン資料

序論

平成 14 (2002) 年を境に、東鳴子温泉の客足は激減した。かつて、湯治場として栄えた東鳴子温泉の現在の湯治客は全体のおよそ 10%だという。

江戸時代には仙台藩藩主専用の風呂である御殿湯がおかれ、50 年前までは湯治場としてにぎやかであった。

このような観光地の衰退傾向は東鳴子温泉地域だけではとどまらず、福島県にある岳温泉地域や栃木県にある鬼怒川温泉地域などの衰退と日本各地にまで及んでいる。地域ブランドの集合体である日本がこのように衰退しており、社会問題に発展している。

本稿では、東鳴子温泉というひとつの観光地の衰退を分析し報告すると共に地域活性化への提言をすることで日本の社会問題を解決するヒントにつながることを目的としている。

本稿では、1 章から 3 章まで東鳴子温泉の現状と課題の抽出を行い、東鳴子温泉を「温泉・観光・地域」という 3 つの切り口をもとに考察したい。1 章の「温泉」では、そもそも温泉とは何か、湯治とは何か、過去から現在にかけて歴史的考察を行う。

2 章の「観光」では、東鳴子温泉地域を活性化するために行われてきた取り組みとその効果などを検証し他温泉地域との比較を考察する。

3 章では産業的視点からの「地域」を取り上げる。東鳴子温泉地域付近の農業、人口、産業や地域と旅館の連携を分析し課題の抽出につなげる。

4 章ではフィールドワークの感想を述べる。

5 章では、前章までに述べられてきた東鳴子温泉の課題を解決するために「多摩大生の自分たちが何をできるのか」という提言を、東京の学生からの視点をもとに地域活性化を考案し、終わりとする。

第1章 現代の湯治における「温泉」について

温泉の内容については、湯治の概要と効果について述べ、東鳴子温泉の概要と東鳴子温泉の良さについて述べる。

【第1項 湯治の発祥について、温泉とは何かについて】

まず第1項では湯治の発祥について歴史的視点の知識を述べる。

湯治が広く一般大衆に広まったのは江戸時代中期頃である。当時の医者であった後藤こんざん(1659~1733)が、「未病養生」を最高の医療手段として述べ、全ての病気は気の問題から生じるとした。病気を予防するための方法として後藤こんざんは食事療法、温泉、お灸などを勧めた。湯治はこのようにして江戸時代中期頃一般大衆に広く普及した。湯治とは温泉に浸かることで心身ともに健康になるのだが、なぜ温泉に浸かると健康になるかは次項で述べようと思う。ここでは湯治をするのに必要な温泉の成り立ちについて述べる。温泉の成り立ちで有力説といわれているのは「循環水説」という一説である。循環水説とは、雨水や雪解け水が地面の岩盤の隙間をぬって地下深く(約数千メートル)に浸透し、多孔質岩層という層に溜まる。そうして多孔質岩層に溜まった雨水が、さらに地下深くにあるマグマ溜まりという高温の層によって熱せられる。熱せられた水は温度の低い水に比べて重さが軽いのでどんどん地表へと向かう。そうして、どんどん水温が下がり沸点に近寄った熱せられた水が地表に湧き出すことで温泉ができる。これが循環水説だ。この説によると温泉は一度地下深くまで浸透したことになるので、地表に湧き出すときには酸素がない状態になる。つまり、温泉が酸化するのは温泉が地表に湧き出してからという事になる。温泉が酸化すると様々な化学反応が起こる。沈殿物や、温泉の成分が析出または沈殿した湯の花が生じるのである。そういうこともあって温泉に入浴するのならば、酸化してまもない、つまり湧き出して間もない源泉かけ流しの温泉がよいのである。また、温泉と呼べるためには下記に上げる物質が一定量以上含まれていなければならない。溶存物質(ガス性のものを除く)総量1000mg以上、遊離炭酸(CO₂)250mg以上、リチウムイオン1mg以上、ストロンチウムイオン10mg以上、バリウムイオン5mg以上、フェロ又はフェリイオン10mg以上、第一マンガンイオン10mg以上、水素イオン1mg以上、臭素イオン5mg以上、沃素イオン1mg以上、ふっ素イオン2mg以上、ヒドロヒ酸イオン1.3mg以上、メタ亜ヒ酸イオン1.3mg以上、総硫黄1mg以上、メタほう酸5mg以上、メタけい酸50mg以上、重炭酸ソーダ340mg以上、ラドン20以上、ラジウム酸1億分の1mg以上。さらに温泉は、泉温によって4種類の鉱泉に分類される。25度以上の冷鉱泉、25度以上34度未満の低温泉、34度以上42度未満の温泉、42度以上の高温泉。江戸時代の医者であった後藤こんざんはこのなかでも特に42度以上の高温泉が優れているとした。これまで温泉の成り立ちについて述べてきたが、次は温泉が明治時代以降どのような位置づけであったかを述べる。明治時代における湯治とは皇室の方が主な利用客であったそうだ。江戸時代に温泉を持っている藩は湯役という税金がかけられたというから、一

般大衆に湯治目的での温泉利用はあまりなかったようだ。また、身分ごとに温泉が分けられていたりしたそう。昭和に入ってから先に挙げた後藤こん山による湯治の医学的有用性が実証され、湯治が医学的に優れたものであると広まった。さらに、高度経済成長期以降になると、温泉は予防や療養目的の湯治としてのものではなく、趣味や行楽としての観光としての面で発達していく。その結果、社員旅行といった大人数で温泉地を訪れた場合の為の大規模なホテルが温泉地に建設されていく。平成に入ると大規模旅館に泊まる形ではなく、こじんまりとした民宿に泊まる女性や高齢者が増えてきた。このように温泉に浸かる目的というのも時代に合わせて変化してきている。東鳴子温泉もこのような変化に追随していくべきか、東鳴子ならではの温泉地としてのスタイルを貫いていくかの選択は大事だと思う。東鳴子温泉の概要については第3項で述べる。

【第2項 湯治を行う事による心身への影響について】

第2項では温泉に浸かることで得られる効果について述べようと思う。湯治目的でも観光目的でも温泉に浸かる事で得られる効果は2つである。1つ目は体温上昇による免疫力アップなどの効果、つまり身体的に良い効果をもたらすという事である。2つ目は高温泉に浸かることで分泌される特定の脳内物質によるリラックス効果、つまり精神的に良い効果があるということだ。第2項では主にこの2つの効果について述べ、さらには鳴子温泉郷の温泉以外で特定の症状に効果のある温泉を紹介しようと思う。

まず身体的にプラスの効果があることについてだが、これは高温泉につかることによって体温が上昇することで様々な変化が起こる。人間の体温が1度下がることによって免疫力は30パーセント低下すると言われている。さらに癌細胞が一番活動的になるのは35度前後といわれている。このことから体温が上昇する事で免疫力が上昇し、癌にかかりづらい身体になるといわれている。しかし、それでは高温の温泉でなくともシャワーでも良い事になる。ここでもシャワーより温泉のほうが良いとされる理由がある。温泉に浸かると新陳代謝による発汗作用により身体の中の悪い物質が排出される。これがシャワーだと新陳代謝による悪性物質の排出が行われず、皮膚表面の汚れだけを取り除くことになる。さらに皮膚表面だけが温められ、身体の中まで温められない。だからシャワーを浴びることは低体温になる原因になるのである。また第1項でのべた温泉に含まれる物質が身体内に浸透する事によって、身体に様々な効果をもたらす。現在知っているだけの各泉質による効能を以下に示す。単純温泉は含有成分が薄く肌の弱い人でも入りやすい。疲労回復や健康増進、外傷の治癒などに効果があるとされている。東鳴子温泉にも多い重曹泉はカルシウムやマグネシウムを含み、皮膚病に効いたり肌がすべすべになると言われている。塩化物泉は入浴後も成分が皮膚表面に付着し、身体が温まるといわれている。高齢者の健康増進に良いとされる。硫黄泉は硫化水素のきつい臭いがあり、気管支炎に効いたり痰をきれやすくしたりする効果があると言われている。しかし刺激が強いこともあり、肌の弱い人には向かない。酸性泉は肌がひりひりするほど酸性が強く、湯ただれを起こす事もあるか

ら肌の弱い人には向かない。酸性泉は水虫や皮膚病に聞くとされている。秋田県の玉川温泉はこの酸性泉であり、玉川温泉は癌の治療に効果があるとされている。玉川温泉では台湾やチリ、玉川温泉でしか産出しないラジウムを多く含む北投石を利用した岩盤浴があったり、酸性泉の温泉を10倍近くに薄めて飲む飲泉があったり、癌に効きそうなコンテツがたくさんあると考えられる。また温泉地と医療施設の提携が良く行われていることも、良い湯治場としての証である。

ここまで、温泉の身体に与える影響を述べてきたが、次は温泉の精神的に与える影響について述べたいと思う。温泉に浸かると温泉の浮力により、体の力が抜けリラックスする効果が得られる。また、42度以上の高温泉に浸かると、脳内物質であるセロトニンが分泌され、これもリラックス効果がある。セロトニンは神経を興奮させるドーパミンとノルアドレナリンの分泌を抑制するので、温泉に入ると気持ちが落ち着いてくるのである。また、医学的根拠は無いが、温泉に浸かりながら交わす会話などにも精神的に良い効果があると考える。温泉に浸かりながら見る綺麗な景色や、温泉から出た後に食べるおいしいご飯などにも「癒し」を感じる人もいるのではないだろうか。

このように温泉に浸かる湯治は医学的に見ても、心と身体に非常に良い効果があることがわかる。

ここまで、湯治とは何なのかという事や、湯治をする事による効果を挙げてきたが、次は東鳴子温泉についての情報を挙げる。

東鳴子温泉は宮城県北東部に位置し、大崎市鳴子温泉郷のひとつである。鳴子温泉郷の他の温泉地として中山平温泉、鬼首温泉、鳴子温泉、川渡温泉がある。鳴子温泉郷は大崎市の過疎地域になっており、真夏の最高気温は30℃を超え、真冬の最高気温はマイナス10℃という寒暖の差が大きい内陸型気候となっている。鳴子温泉地域では北西から広がる肥沃な耕土により、稲作が盛んである。しかし急激な人口減少や農家の減少により、1次産業から2次、3次産業へと産業就業者がシフトしてきている。かつて農家が冬や春の農業のオフシーズンに療養目的で湯治を行っていた。したがって農家の減少は湯治客の減少、鳴子温泉郷が湯治の温泉から観光目的の温泉にシフトしていく可能性がある。私は湯治についての説明、鳴子温泉郷の温泉旅館数の変化、宮城県でのフィールドワークで得た知見を述べた上で、「現代の湯治」というテーマの下での湯治客アップの提案や地元住民や企業への湯治の良さのPR方法等を、学生視点で提案していきたい。

東鳴子温泉の特徴をひと言で言うならば、「湯治に特化した重曹泉の温泉地」である。かつては農業、林業を中心に栄えたが、後継者不足などによる第一次産業の衰退は、国内の他の過疎地域と問題点を共通にしている。東鳴子温泉の旅館などで設立されたNPO法人東鳴子ゆめ会議によって様々なイベントが行われている。イベントの内容等については第2章や第3章で述べようと思う。第1章は温泉というテーマなので温泉という内容だけで見た東鳴子温泉について述べたい。先に挙げたように東鳴子温泉は鳴子温泉郷のひとつであ

るが、ここの温泉はひと言で言うならば、皮膚病や美容に良いとされる重曹泉に特化した温泉地である。泉質別に温泉の数を分けると、昭和 51 年時点で、重曹泉が 17、単純温泉が 12、硫黄泉が 6、食塩泉が 2 から成る。このほかに未分析の温泉が 10 もある。現在確認済みの温泉では重炭酸土類泉、硫酸塩泉もあるそうだ。東鳴子温泉だけで 5 から 6 種類の温泉に入れることになる。このように重曹泉が多い東鳴子温泉は平成 19 年 (2007) 4 月に「重曹泉の郷宣言」をしている。このように鳴子温泉郷の中でも東鳴子温泉は重曹泉が多い温泉地であることがわかる。

【第4項 東鳴子温泉の良いところと悪いところについて】

第 3 項で東鳴子温泉は優れた重曹泉が多数存在する温泉だと述べたが、第 4 項では東鳴子温泉の良い点と悪い点—というよりは課題というべきか—について挙げる。これら良い点と悪い点は 9 月 13 日から 9 月 16 日まで多摩大学インターゼミの東鳴子温泉活性化プロジェクト班 (阿部、山本、宮城) のフィールドワークから思ったことを記載する。

まずよい点に関しては、空気が綺麗で静かであるという事である。またフィールドワーク中に宿泊した大沼旅館さんの露天風呂は景色も素晴らしかったが、高温泉で心身に良い効果があると実感した。9 月 13 日の説明で大沼旅館は美人の湯である、と説明を受けたが、肌が綺麗になった実感があった。大沼旅館ではプチ湯治プランとして朝夕食のご飯と味噌汁以外は全てお客さんが料理するものがあつたが、このプランと東鳴子の素晴らしい温泉、周辺の静けさがあれば、本格的な湯治ができそうである。実際に私 (宮城和也) 自身、フィールドワーク中に 1 ヶ月くらい東鳴子に滞在して、勉強や読書をしてみたくなった。

しかし、良い点ばかりではない。これは東鳴子温泉だけにいえることではないのだが、地域住民と旅行者の接点が少ない印象を受ける。さらに、東鳴子温泉が美容や皮膚病に優れた重曹泉を多数保有することは、フィールドワークから帰ってから知った。これは美容効果に優れた温泉があることをもっとアピールする必要がある事を示唆しているのではないだろうか。湯治といえば基本は高齢者や第 1 次産業従事者などが行うものであるが、「美容」という面で東鳴子温泉を全面的にアピールしたら、さらなる新規湯治客の獲得も見込めると考えられる。また、先に軽く触れた「地域住民との交流の少なさ」であるが、これは第 3 章で述べる。

2章 観光

650年の湯歴を持つ東鳴子温泉は、古くから湯治場として知られ、東日本を代表とする温泉地だが、産業構造の変化や観光客の趣向、ライフスタイルの変化により、湯治客は激減した。そのため近年では、客足増加を図るために、多くの施策を行っている。

本章では、東鳴子温泉の客足が減少した要因や、東鳴子温泉が取り組んできた地域振興策やその結果、また他温泉地の地域づくりの知見から「観光」という切り口での東鳴子温泉の現状の課題を抽出することを目的とする。

第1項 客足激減の要因

東鳴子温泉はここ10年間で客足が激減した。平成4(1992)年の鳴子温泉郷の入込数は、3,924,200人だが、平成18(2006)年では2,194,060人と約半数になっている(図1参照のこと)。

鳴子温泉郷全体として入込数、日帰り客、宿泊客のいずれも右肩下がり減少し、近年では微増もしくは維持のような傾向にある。

図1 鳴子温泉郷の客足数推移

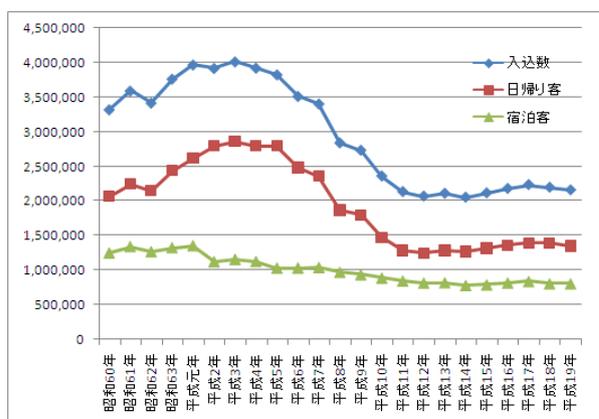
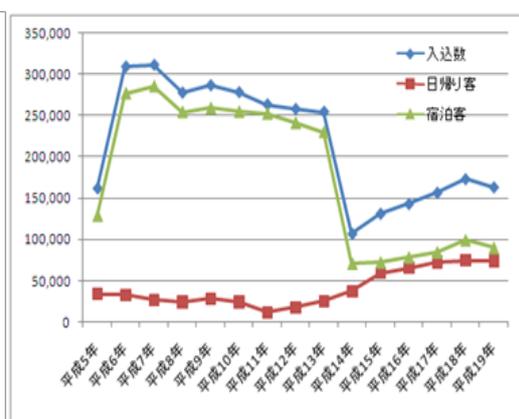


図2 東鳴子温泉の客足数推移



平成19(2007)年 宮城県経済商工観光部観光課調べ

図2から、東鳴子温泉の客足数は平成14(2002)年を境に、激減していることが分かる。平成6(1996)年の入込数は309,500人だったが、平成14(2002)年の入込数107,400人と約3分の1に減少している。平成15(2003)年からは振興策が功を奏し、徐々に客足が増加している。また、客足増加の要因の1つとして、平成18(2006)年より宮城県が全国にPRを行っている宮城デスティネーションキャンペーンの影響もあるのだと考えられる。しかし、平成15(2003)年以降の推移を見ると、増加しているのは日帰り客である。東鳴子温泉では、基幹産業は旅館業であり、湯治を体験してくれる宿泊客を増やしたいと考えている。平成13(2001)年の推移を見ると、入込数と宿泊数は近い数字であり、日帰り客

が数少ないことが分かる。つまり、振興策は東鳴子の基幹となる産業にとって本質的なプラスに繋がるような結果となっていないのだと考えられる。

客足の減少の要因として、「第1次産業従事者の減少」「温泉の観光化」「観光地・慰安場の増加」「景気の低迷」「山間地という環境」という5つの要因が考えられる。

湯治はそもそも、農林漁業に携わる第1次産業従事者が習慣的に利用するものであった。半年に1度1週間～2週間の湯治生活を送ることで、半年間の慰労や、次半年間の仕事を行う精力も養えるというものだった。彼らは、湯治を半年に1度の楽しみとし、仲間たちと一緒に湯治に向かっていった。湯につかる以外は、仲間たちと談笑し心も体も癒していたのだという。しかし、第1次産業従事者は近年では激減した。主要な顧客であった第1次産業従事者数の減少と共に、東鳴子温泉の利用者数は激減した。第1次産業の構造変化は湯治の市場規模をも大幅に縮小させた。

「温泉の観光化」というのも東鳴子温泉における客足減少の要因の1つである。山村順次（平成9（1997））によれば、当初温泉の主要因は療養や慰労であったが、人々のライフスタイルや趣向の変化により、温泉の目的が観光化した。従来重視されていた泉質というものは、現代ではあまり重視されずに、温泉地の周辺観光名所や名産品などが旅行地選択における重要な決定要因となった。詳しくは第4項にて説明するが、東鳴子温泉では周辺観光地や名産品があまり魅力的とはいえず、人々が考える理想の観光地と知覚差異があるために、客足が増加しないのだと考えられる。人々の趣向の変化は、観光という産業にスポットライトをあて、観光地や慰労施設の増加を引き起こした。ディズニーランドに代表されるアミューズメントパークの本格化や、スーパー銭湯などのような慰労施設が都心部にまで多数増設されるなど、東鳴子温泉にとっては競合が増加したということになるであろう。人々の多様化するニーズは、消費者にとって複数の選択肢を得る結果となったのだ。また、長引く景気の低迷も客足に影響を与えている。平成21（2009）年のリーマンショックをきっかけに、再び日本経済は不況期に入ってしまった。さらにこの不況は、100年に1度の大不況と言われるほど、様々な商品やサービスに波及する大規模なものになってしまっている。特に地方観光地など地方温泉地への影響は深刻だ。ただでさえ多大な金銭をかける旅行が、不況の影響により経済的に余剰負荷と判断されるため、まっさきに節約される。「景気の低迷」が東鳴子温泉に与える影響は少なくないだろう。

東鳴子温泉は山間地域にあり、農家にとって悪条件であることも東鳴子温泉の客足減少に負の影響を与えている。東鳴子温泉は宮城県の北西に位置し山形県・秋田県と接する山間地帯であることから、農業の条件が厳しく農家の高齢化や後継者不足、遊休農地が急速に増加したのである。

以上のような5つの要因により、東鳴子温泉への客足は激減した。かつて湯治で繁栄していた旅館は、多大なダメージをうけ多くは廃業に陥った（図3を参照のこと）。平成21（2009）年現在、東鳴子温泉では14軒の旅館が営業しているが、ここ20年間で6軒の旅館が廃業したという。

図3 鳴子温泉郷の宿泊施設数推移

	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17	平成18
宿泊施設数	130	128	128	125	123	123	123	123	125	98	97

平成19(2007)年 宮城県経済商工観光部観光課調べ

第2項 地域振興の動き

農民や漁民の「骨休めの場」として名高く、湯治機能を強く保持する東鳴子温泉は、産業構造や観光客の趣向やライフスタイルの変化によって、温泉本来の療養や保養的機能の価値が失われていた。このような状況下で、東鳴子の民間が危機感を持ち、自ら地域資源の再確認を行い始めた。平成14(2002)年に民間が中心となり地域づくりの動きが芽生え、温泉資源の医療的優位を生かす湯治市場の拡大へ積極的に活動を始めたのであった。地域の基幹産業である旅館の後継者が集まり、今後の方向性を議論した結果が「現代の湯治場づくり」である。一過性の観光地ではなく、本来の「湯治文化」が持っていた輝きや豊かな地域資源を、現代の視点から改めて発掘・評価し直すことで、様々な地域や客層から新たな湯治客を迎えられる温泉地にしていくという方針とした。具体的な目標として、明治43年に水害で損壊した「御殿湯」を復活させることを掲げた。

しかし、その後一年にわたり、議論が重ねられた地域づくりは行き詰ってしまい、たった一年間で挫折してしまう。いかにしたら、「御殿湯」は復活させられるかという壮大な構想を思い描くことができず、資金やノウハウも足りない地域づくりはうまくいかなかった。

平成15(2003)年春、地域コンサルタント会社の方に、箱モノを作る以前の、地域のまとまりのなさを指摘される。地域づくりに動いていた人々は、地域には多くの垣根が存在しているが、そうした垣根を取り払い、地域がひとつになることが重要だと理解し、以降の地域づくりは「垣根を外した一体型の地域づくり」がメインテーマとなった。その後、宮城県地域振興課から、みやぎエコ・リゾート推進協議会の事業に指定されたことで、東鳴子温泉の地域おこしが活気づく。6月には「東鳴子地区地域づくり検討会」が設立され、活発な議論が行われた。

平成15(2003)年5月、やがて検討会は、観光協会や町内会も巻き込んで、「東鳴子ゆめ会議」に発展した。平成19(2007)年秋にはNPO法人に正式に認証された。

平成15(2003)年8月に東鳴子ゆめ会議が開催した「光の盆」は、住民の垣根を外す第一歩となる。普段閑散としている湯治場の通りに1,500本の竹灯籠が幻想的な光の回廊を作り、地元住民や湯治客を楽しませた。

また、平成16(2004)年6月に構造改革特区「鳴子温泉郷ツーリズム特区」として内閣府に認定された。観光・農業・地域が手を取りあい、一体的なツーリズムを推進し、産業振興及び地域活性化を図るというものである。具体的な規制緩和としては、①農地所有者

による市民農園の開設、②農地取得下限面積の引き下げ、③特定農業者による濁酒の製造許可者の製造数量緩和、の3つである。

新しい湯治需要を創造するため、東鳴子ゆめ会議では都会人に目を向けようとの結論に至り、「現代の湯治」が生まれた。忙しい都会人でも湯治文化が体験できるよう、本来は1~2週間の湯治を2泊3日型のプチ湯治とし提供することになった。

従来の湯治客であった第一次産業従事者は、かつて湯治に来る際は仲間で一緒に泊まり、湯につかる以外では談笑し、楽しんでいたという。しかし、東鳴子ゆめ会議が設定したターゲットは「都会人」というセグメントであり、昔のように集団で来客するようなことは以前よりは少ないと考えられる。山村（平成9（1997））は、1970年代では、企業を中心とした大型旅行が多く行われていたが、現代は一般的に少人数での旅行が主流だと指摘している。つまり、現代においての湯治客には、湯につかる以外の時間の過ごし方を提供しなければいけなく、コンテンツが必要とされているということである。湯（旅館）だけでなく、湯（旅館）と湯周り産業（農、商、工など）が一体となった集客が必要なのだ。地域資源をどう活用し、組み合わせれば湯治場再生になるのかという視点が大切だといえるだろう。これらの点に鑑み、ここからは東鳴子が行ってきたイベントなどのコンテンツを検証していく。

第3項 具体的な施策

・イベントの開催

まちおこしの風潮が浸透していった中で、平成17（2005）年9月には、「GOTEN GOTEN 2005 アート湯治祭」が開催された。この通年型イベントには東京や仙台からアーティストが東鳴子を訪れ、湯治しながら作品制作や発表を行うというものである。アーティスト自体の湯治とそのお披露目の場としてのイベントが一体となったもので、イベントを通じて湯治文化へのきっかけを与えている。

また、東鳴子ではトライクツーリズムの普及にも取り組んでいる。平成17（2005）年度全国都市再生モデル調査事業において、東鳴子ゆめ会議は観光都市における脱自動車・健康増進両立プログラム調査の認定を受け、トライクというユニバーサルデザインの3輪自転車を導入している。トライクは湯めぐりやサイクリングなど湯治場の足として利用されており、トライクの世界選手権といった湯めぐり、里山の名所めぐりを行うものもある。

・農山村体験

農林業と湯治を組み合わせた「田んぼ湯治」「山守り湯治」「地大豆湯治」も東鳴子の特徴的なコンテンツである。田んぼ湯治とは、種まきから収穫祭まで年10回ほどの田んぼ仕事と湯治を組み合わせたものである。ベテラン農事者の指導で約2時間の田仕事を終えた後で、指導農家の茶の間で採り立ての野菜や山菜を使ったいつもの農家料理を食べる。その後東鳴子温泉の旅館の温泉に入って汗を流すという、農業体験プログラムである。田ん

ぼ湯治は非常に人気があり、リタイアしたシニアが昔を懐かしがって参加するケースや小さな子供を持つ親が子供の農体験と食育を兼ねて参加するケースが多かったという。田んぼ湯治は、遊休農地の有効活用や、都会人のアプローチとして人気があった取り組みだったが、指導農家の方が亡くなったのと同時に、プログラムの停止となった。「山守り湯治」とは、温泉の源につながる山林を手入れし、山仕事の後に温泉で汗を流し疲れをとるという取り組みである。山守り湯治は、東鳴子の地元小学校の総合学習にも取り込まれ、桜、もみじ、栗、などを植樹し、その後も子供達と継続して手入れを行っている。「地大豆湯治」は、平成 21（2009）年から始まり、大豆の畑仕事と湯治を組み合わせたもので、NPO トーシバと連携している。

・医療機関と湯治の連携

湯治と医療をリンクした「温泉療養プラン」は、大崎市立病院鳴子温泉分院と湯治宿の連携をとり、リハビリや検査に加えて湯治を提供している取り組みである。病術後のリハビリを行いたい人などに向けた提案となっている。

・他湯治場との連携

湯治場つながりでは、山形の肘折温泉、秋田の秋の宮温泉と連携をはじめた。湯治場の衰退に同じように直面するものどうしが「渡り湯治」という連携を保つことにより、他湯治場を競合とみるのではなく、東北地域の湯治場の魅力を上げようとしている。

このような多彩な取り組みが評価され、平成 18（2006）年 10 月 17 日に鳴子ツーリズム研究会が、総務省過疎地域自立活性化優良事例の最高賞である「総務大臣賞」を受賞した。

しかし、第 1 項でも述べたとおりイベントの成果として、湯治客増加には至っていない。「地域の垣根を外す」というコンセプトのもと、多彩な取り組みを行ってきた東鳴子温泉だが、これからは旅館や商店の業績改善につながるように意識することが重要であると考えられる。消費者に見出されている「足を運ぶ価値がある場所」から「湯治をしに行く場所」と知覚を変化させる必要があるだろう。そのためには、更なるコンテンツの創出や湯治価値の顕在化が必要である。

第4項 温泉以外の観光資源

次に、東鳴子温泉全体として観光客を引き付ける魅力をソフトの面ではなく、周辺観光施設や文化的価値などを検証する。東鳴子温泉区域には、観光名所というような目立ったものがない。そのため今回は調査対象を、鳴子温泉郷の観光名所と拡張し研究していく。

鳴子温泉には、名産品であるこけしについての歴史が分かる岩下こけし資料館や全国各地のこけし約 5000 本を展示している日本こけし館が現存する。鳴子温泉の裏山に 837 年鳴子火山によって出来たカルデラ湖（瀉沼）があり、ひっそりとしてエメラルドグリーンの水をたたえている日本一の酸性湖とされている。名産品としては、鳴子こけしと鳴子漆器が挙げられる。鳴子こけしの特徴は、形は胴が太く肩と裾が張り、安定感がある。起源は

約 200 年前の文化・文政の頃である。鳴子漆器は、平成 3（1991）年に国の伝統工芸に指定され、塗りは木目を生かした木地呂塗りやふき漆仕上げ、また独特の墨流しの技法の竜文塗がある。尚、食の名産物には、栗団子やしそ巻きがある。

中山平温泉には、鳴子峡という新緑・紅葉の名所で遊歩道が完備している溪谷があり、鳴子温泉郷随一の観光名所とされている。昭和 7 年に史跡名勝天然記念物保存法により、当時の文部省より名勝に指定され、昭和 36 年には宮城県名勝指定を受ける。また、鳴子熱帯植物園は、温泉熱を利用したドーム型の大温室で、熱帯・亜熱帯の植物約 1000 種を扱っている。

鬼首温泉には、鬼首間歇泉（かんけつ泉）が現存する。国の特別天然記念物にも指定されており、約 20 分ごとに 15m もの高さまで熱湯を吹き上げる「弁天」である。間歇泉が多く見る事が出来る地獄谷遊歩道が存在し、散策用の木道の両側は、耐えず吹き出る温泉と蒸気で一杯となっている約 30 分の散策コースである。また、上野々スキー場は傾斜もゆるやかで、小さい子供でも楽しめるファミリー向けスキー場。鬼首スキー場は夏になるとパラグライダー講習会などでにぎわう。観光所ではないが、鬼首温泉には鬼首地熱発電所が存在する。

鳴子温泉郷に隣接する大崎市岩出山地区（旧岩出山町）には、有備館という日本最古の学問所が現存する。江戸時代の学問所の姿を今に伝える貴重な文化財である。庭園は伊達政宗が居城した岩出山城本丸跡の断崖を借景として池中に島を配した回遊池泉庭園となっている。また、同地区に、感覚ミュージアムという視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚といった”五感”をテーマとする日本で初めてのミュージアムがある。

鳴子温泉郷の観光名所は、何ととっても美しい景観が根幹となっている。美しい自然環境が中心となっているが、文化的価値を有する観光施設があまり多くない印象だ。また、宮城県では平成 18（2006）年より宮城県デスティネーションキャンペーンを積極的に行っており、「美味し国 伊達な旅」というキャッチコピーで全国に PR しているが、鳴子温泉郷では、食の名物があまりないように感じられる。気取らないおいしさが鳴子のふだんの味であると、観光パンフレット等には記載されているが、温泉の観光化が風潮としてある昨今では、食の名産品が与えるインパクトは少なくないであろう。

鳴子温泉郷の温泉以外の観光資源は、美しい景観というものがメインであり、他観光資源はどことなく地味な印象である。

第5項 他温泉地の地域づくり

これまでは東鳴子温泉の地域づくりについて取り上げてきたが、本項では他温泉地域の地域づくりを取り上げ、温泉地における地域活性化の有効な知見を得たい。全国の数多くある温泉地の中でも、特徴的な取り組みや戦略をとっている湯治場や地域づくりに成功した温泉地などを取り上げることとする。

1) 湯治場としての観光戦略

秋田県・玉川温泉

多様な泉質と豊富な湯量と効能から本格的な湯治場として栄える。効能としては、高血圧症、動脈硬化症、婦人病、神経痛、皮膚病、喘息、癌などに効くと言われており、医療的効能目的での観光客が多い。特に、癌に効くと言われている温泉地は数少なく、来客者も心を癒しにではなく、体を良くするために入浴しているという。

熊本県・黒川温泉

「本物志向」というコンセプトでの街づくりで成功を収めた。温泉街にありがちな歓楽的要素や派手な看板を廃し、全体に統一的な町並みを形成するなど、意欲的なマーケティングを行っている。もともと、国民保養温泉地の指定を受けていた湯治場であったが、「都会とは全く違う自然の風景がなければ、本物志向の客をつかめない」という考えを根幹に街全体のブランディングを行った。具体的な施策としては、洞窟風呂や一人露天風呂を演出したことや、日本庭園ではなく野の山を再現した街づくりを行ったことで、本物の温泉としての世界観を醸成した。盛況の背景には、地域住民の徹底したマーケティングの努力や成功ノウハウを温泉街の住民皆で活用したということがある。住民の一人ひとりが「全員での成功」を体現した結果が成功した要因と言えるだろう。

2) 特徴的な地域づくり

長野県・野沢温泉

野沢温泉の特徴として、13軒ある共同浴場が挙げられる。これは地元の湯仲間という組織によって維持管理運営されているが、観光客にも開放されており、無料または寸志で入浴できる。特筆すべきは、温泉と自治活動と言う両者が一体となった温泉コミュニティを立ち上げたということであり、温泉権と利用権を分け、それぞれを管理する組織・制度も分けることで温泉を守ってきた。温泉は村のものであり、村に住んでいれば利用する権利が生まれるという温泉所有を「総有」することで、より良い地域づくりを目指している。温泉と言う地域資源を商業目的で活用するのではなく、野沢の温泉は生活の場であり、生活の場と温泉が共存する場としていることが特徴的である。

大分県・由布院温泉

街の景観や規模を徹底的に守ることで、地域一体となって観光客を歓迎する雰囲気を作り出した。バブル期の大型開発計画に、リゾート法の制定などで反対し、昔からある街の特色をそのままにすることで住民の愛着心を醸成し続け、地域全体での街づくりを行った。また、街ぐるみで映画祭や音楽祭を開催し、その様子をメディアに取り上げさせることで話題を呼んだ。歓楽色を徹底的に排除しつつも映画祭などにより文化的価値を訴求し続けたことで、女性が行きたくくなるような温泉地として確立した。

栃木県・鬼怒川温泉

由布院温泉とは対照的に、団体客をターゲットとした大型宿泊施設を多く建ててしまい、周辺地域の魅力が失われた。また旅館やホテルでの問題意識や地域づくりの在り方についての考えを共有することができなかった。尚、同じ失敗例として、別府温泉も挙げられる。現在では、医療観光という切り口から客足を増やしている。

全国の温泉地の地域づくりの歴史から、同じ温泉地域間での交流や問題意識の共有が重要だということが分かる。観光客を地域内でしっかり受け止め、産業面の戦略とそれを制約する社会・環境と調和させた持続的な観光戦略が地域活性化には必要不可欠だということも明らかになった。また、温泉の効能が特化していることを前面に PR することで、観光客に特徴的に知覚させることに繋がると考えられる。

第6項 課題の考察

以上を踏まえ、東鳴子温泉の地域づくりとして、以下の点が今後の課題といえるだろう

- ・ターゲットの変化に対応した地域づくり
- ・地域が一体となって地域づくりに取り組むこと
- ・東鳴子地域の農業の衰退
- ・コンテンツ不足

温泉という質の高い地域資源があるにもかかわらず、産業構造や人間の変化に湯治場が対応できていないと考えられる。湯治は、第一次産業従事者というターゲットに適したものであるが、現代人に提供するためには最適な方法で価値を顕在化し、ターゲットが好むようなコンテンツの創出をすべきであると考えられる。湯治の本質的な価値は現代人にマッチするものと考えられるため、価値の顕在化のさせ方が重要なカギを握っているといえるだろう。また、人気コンテンツであった「田んぼ湯治」が農家の方が亡くなったと同時に終了したということから、湯治場の再生のためには東鳴子地域の農業がしっかりとし、持続可能性を高める必要がある。

第3章 地域と農業

地域を活性化していくには、地域間の交流と地域外との交流が不可欠になっていくと感じる。その中、現在の東鳴子地域の地域コミュニティがどうようになっているかを検証し、今後どのように「地域の交流」について深めていけるかを、鳴子地域の根幹産業である「農業」を絡めて提案を行っていく。

第1項 鳴子地域の人口と産業 —低迷をたどる今—

第2項 地域連携 —東鳴子ゆめ会議—

第3項 農業 —グリーンツーリズムの可能性—

第1項 鳴子地域の人口と産業

東鳴子温泉は、宮城県大崎市の中に含まれている。大崎市は、2006年3月31日、古川市、遠田郡田尻町、志田郡三本木町・松山町・鹿島台町、玉造郡岩出山町・鳴子町の1市6町が新設合併して誕生した市である。東鳴子温泉地域は、旧鳴子町に位置する。旧鳴子町は、温泉を主とした観光地区で、ホテル・旅館が多く立地する地区である。また、鳴子温泉・東鳴子温泉・鬼首温泉・中山平温泉・川渡温泉の5つの温泉を有する。

そんな地域環境の鳴子地区の人口は、全人口 8,526人のうち就労人口 4,460人である。(平成13(2005)年国勢調査)大崎市の中でも、特に過疎化が進んでいる地域となっている。鳴子温泉地域の人口減少率は、昭和35年(1960)～平成12(2000)年の40年間で21%減少となっており、大崎市の39.4%増加と比較すると、明らかに過疎が進んでいることがうかがえる。

居住者が就いている主な産業は、農林業11.4%・観光業(飲食店、宿泊業、複合サービス業)24.1%となっている。

しかし根幹産業である「農業」は衰退の一途をたどっている。現状は‘鳴子町の水稲栽培面積’が平成7年の643haから平成17年444haと、31%減少となっている。‘耕作放棄地’は、平成7年の21haから、平成17年の94haと、4.5倍増加となっている。後継者不足も課題として挙げられる。

また、もう一方の根幹産業である「観光業」は、第2章で詳細は述べてあるが、商店の廃業化等が進み、観光客も平成4年の入込数約400万人に比べ平成18年入込数は、約220万人と14年間で約半分の減少をたどっている。

日本全体としても、経済状況が低迷しており、1地域が自立し活性化へ向かうことが重要だと考える。

東鳴子地域では、「定住者の減少」「観光客の減少」「地域経済の低迷」を抱える今、地域間・地域外の交流を通して、地域一体となって地元を盛り上げていくことが大切である。

地域連携の必要性と、東鳴子の現状について述べる。

第2項 地域の連携

観光による活性化を目指すことは、つまり観光客である「よそ者」を受け入れ続けることでもある、と清水慎一、小林裕和は述べている。よそ者とは、旅行者、組織団体、行政等である。地元組織で固まるだけでなく、旅行者等をその地域の生活者として受け入れることが、観光地として活性化していくためには重要である。よそ＝外部との交流は、地域を活性化する取り組みのきっかけとなり、刺激となりうるからである。また、地域が衰退することの危機感も共有し、経済的に自立することを目標として全体で動いていくことで、より地元地域への意識が生まれてくると考える。

その他にも、外部は自分たちと違う環境の知識を持っており、交流を通してそれを吸収し生かしていくことができる。外部との比較は、日常の当たり前である自分たちの生活に、その地域特有の風習や文化が「価値」があることを気づかせてくれる。しかし、地域活性化といっても、ありのままのまちづくりをしていくことが重要である。清水慎一、小林裕和は、高度成長期の合理的なまちづくりは「都市化」を徹底的に追求し、その結果、地域が便利になるにつれ、地域らしさを失うとともに顔の見えにくいまちが形成された、と述べている。持続可能な地域づくりをしていくには、現在の生活環境の中にある「価値」を引き出すことが重要である。

「価値」を顕在化するには、地域間でも話し合い交流する場をもつことが重要である、その場を通して危機感の共有、今後の展望を考察する必要がある。そして、外部との交流を通して、活性化への更なる刺激、知識の吸収を行うことができ、今後の発展への糧としていけると考える。

現在、東鳴子温泉には、「東鳴子ゆめ会議」という NPO 法人の地域団体がある。(平成 19 (2007) 年認証) 詳細は、第 2 章でも述べたが、平成 15 (2003) 年 5 月、旅館をはじめとする観光団体だけでは地域づくりはうまくいかず、地域に住む多くの人たちが一体となって取り組まなければならないということで、旅館組合、観光協会、町内会を結ぶプラットフォーム的組織「東鳴子ゆめ会議」を立ち上げたのである。地域一体で、観光地として盛り上げていこうという中、05 年度、全旅連「人に優しい地域の宿づくり賞」厚生労働大臣賞を受賞や、民間主導で異業種の組織鳴子ツーリズム研究会は 06 年度全国過疎地域自立活性化事例で「総務大臣賞」受賞までは、地域一体となって盛り上がっていた。しかし、現状として‘地域一体’の取組としてのイベントを起こす動きが活発でなくなっている。フィールドワークを通して感じたことだが、最近の提示されたイベント企画主体は旅館であり、観光地活性化の主体者が旅館のみである感じた。

地域コミュニティはできているため、それをより活発にしていくことが重要である。そこで、鳴子地域の根幹産業である「農業」の可能性を探ると共に、地域コミュニティ活性化を考察していく。

第3項 農業

現在日本では、食の問題は連日メディアを賑わせている。それだけ消費者の食へのニーズは高まっており、それと同時にアグリビジネスも活発となっている。

日本全体の就業者の割合は、第1次産業は 5.1%、第2次産業は 25.9%、第3次産業は 67.3%となっている（平成 17（2005）年国勢調査）。

食はより安心・安全へとニーズは高まっているが、就業者が 5.1%まで落ち込んでおり、日本の食糧輸入の7割は海外の依存している。海外とは大きいところでは、アメリカ 32.5%、EU12.8%、中国 9.3%、豪州 8%、カナダ 7.4%の5カ国となる。（農林水産省 平成 20（2008）年データより）

日本は穀物等を年 2940 万トン輸入し、その生産のために使われる海外の水は約 588 億トンにのぼる。また、海外に依存している作付面積は 1233 万ヘクタールにおよび、国内農地面積の約 2.6 倍に値する。しかし一方で、国内のうちには活用されておらず、水田 252 万ヘクタールのうち、約 4 割が生産調整の対象になっている。それに加え、耕作放棄地（休耕農地）は、38.6 万ヘクタールに及ぶ。38.6 万ヘクタールとは、東京都の約 1.8 倍の広さに及んでいる。しかし、新規就農するにも、資金や人脈、栽培技術のノウハウといった高いハードルがあり、乗り越えていくに厳しい現状もある。

このような問題は、東鳴子地域も例外ではない。稲作の生産調整や農産物の輸入自由化など農業を取り巻く環境も、年々厳しさを増し、さらに就労者の高齢化が進むなど後継者不足が深刻な問題となっている。このため、今後の農業は従来の農業経営から脱却し、優良産地化の形成や有機米体制の強化など高生産性で高付加価値の農業展開を進め、未来を担う若い人々にとって魅力ある農業へ転換していかなければならない、と言うのが大崎市の見解である。

日本の食を作る農業が、地域から衰退する今、担い手不足は深刻な問題である。

そこで、地域の産業活性化としても、観光地としても有益である「グリーンツーリズム」の可能性を探ってみた。

「グリーンツーリズム」とは、自然に恵まれた農村・山村・漁村に滞在して、自然や文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動のことを言う。また、観光客に食や自然の大切さやスローライフを体験してもらうとともに、町の魅力を再発見し、農林業や伝統産業の活性化につながる相互交流化が期待されている。東鳴子温泉地域の根幹産業である「農業」は、後継者不足・休耕地増加と課題はあるが、観光客・地域の人々の交流を深めていけるグリーンツーリズムを通して、貴重な地域資源となると考える。またあわせて、地域交流間の交流を増やすことを目的とする。

グリーンツーリズムを成功した例として、「ロハス越前（越前市）」があげられる。ロハス越前とは、市内に存在する美しい自然、伝統文化、伝統産業や多様な農林業生産活動を活かした農山村滞在型余暇活動の推進を通して、地域の農林業や伝統産業の振興と活性化を図ることを目標に、平成 14 年度より始動した。受け入れ側の農業者に無理のないよう、

自然体で継続した活動とするため、体験のための体験メニューは特別に作り出さず、農業者が実際に行う農作業を体験メニューに組み込み体験するよう取り組んでいる団体である。等身大の地域づくりを行っている。活動の当初は、民宿を始めようと農家に呼びかけた際、農家の反応は「都会の人が山奥にきて楽しいわけがない」「田舎料理など喜ばれない」と消極的だったが、実際行ってみると、農家にとって当たり前の暮らしが都市生活者にとっては新鮮なものとして目に映ることがわかった。その宿泊客の感動する姿が、農家に人にとって自分たちの暮らしの価値に気づくきっかけとなったのである。

このように、グリーンツーリズムを通して観光客等の外部との交流、そしてその体制を作り上げる過程で、自分たちの地域の成り立ちや景観の中から地域の豊かさやユニークさを見つけだし、地域間の交流を図っていけないのではないかと考える。

第4章 フィールドワークの所感【宮城和也、阿部剛平、山本信子、石川健太】

1. 宮城和也のフィールドワークの所感

フィールドワークの所感として私（宮城和也）は、大沼旅館の館長である大沼さん、鳴子観光協会の宮本武氏、宮城大学で鳴子温泉地域の研究をしている、宮原教授のお話を中心に述べようと思う。

大沼伸治氏によると、東鳴子温泉の湯治客は三十年前には繁盛していたが、最近は年々湯治客が減少しているようだ。また、近年の東鳴子温泉の顧客も7割が宮城県内で残りの3割が県外だそうだ。また、大沼旅館に関して言えば、県外から来る人の多くが関東圏らしい。東鳴子温泉の利用客の年齢層は多くが高齢者で、時々若い女性なども来るらしい。今後の新規顧客獲得のターゲット層は美容と健康に対する意識の高い二十代と三十代の人との事だが、それらターゲットに対するPRが不足しているような気がしたというのが個人の意見である。

次に鳴子観光協会の宮本武氏にインタビューした感想を述べようと思う。宮本さん曰く「スローライフ」と「鳴子の文化と伝統芸能の保存」を推し進めているのだそうだ。鳴子温泉地域に来た時には時計を見なくても鳴子の温泉地を巡れる観光ガイドの作成や、スローライフを推し進めるために地元のものでないコンビニとスーパーを追い出したいという事をおっしゃっていた。だが、宮本氏が徹底したいスローライフを達成するために、協力してくれる地元の人ほどのくらいいるか、スローライフを徹底するためにコンビニやスーパーを追い出すのは、地元の成長を無視した現状維持の考えではないか、と思う。また、伝統芸能の保存にあたって必要なものはなにかを明確にする必要がある。

最後に、宮城大学の宮原郁子教授のお話を聞いての感想を述べようと思う。宮原教授に質問したかった内容は「東鳴子温泉についてどのように思うか」という事だった。その質問について宮原先生は「東鳴子温泉は旅館と地元住民との距離があり、旅館の館長である大沼さんが様々なイベントを行っても住民を巻き込んだイベントが出来ていないように思える。地元住民を巻き込んだイベントを行うために新規イベントを提案するのではなく、既存のイベントに地元住民を巻き込む仕組みを作る必要があると思う。」とおっしゃっていた。九月十三日から九月十六日までのフィールドワークでの全体的な感想としては、地元住民を巻き込んだイベントをする必要があり、新規顧客獲得とリピーター獲得の戦略が明確でないという印象を受けた。

最後に十月十五日に行ったフィールドワークの感想を述べようと思う。この日は多摩境駅と南大沢駅の間にある「いこいの湯」という所に久恒啓一教授、インターゼミ東鳴子温泉班（阿部、宮城、山本）のメンバーで行った。多摩市近辺で唯一の源泉かけ流しの温泉だそうだ。第一項で述べたように、温泉が一番酸化していない状態は源泉かけ流しの状態の温泉なので、ここの温泉は優れていると思う。この温泉は源泉温度42度以上の高温泉であった。第二項で述べたように高温泉がリラックス効果として最も優れているので、「心」

に効く温泉としても優れていると思う。しかし、源泉かけ流しの温泉は屋外にあり、屋内にあった温泉は全て循環型温泉であった。さらに、循環型温泉と源泉かけ流しの温泉の区別が明確でなかったように思える。源泉かけ流しの温泉の素晴らしさをもっとアピールした方がいいと思った。また、「いこいの湯」の同じ敷地内にあった食堂も料理の見た目と味を重視しているように思えた。「いこいの湯」の入り口付近には地元である多摩で作られた味噌などが売られており、地域の連携もとれているかと思われた。

2. 阿部剛平のフィールドワークの所感

私は鳴子温泉郷に2回足を運んだ。それぞれの感想を以下に書きたいと思う。

1回はインタビュー中心に、2回目では湯治体験の感想を記す。

1回目 平成21(2009)年6月7~8日、東鳴子温泉

私は実家が宮城県仙台市にある関係で、仙台から東鳴子までは車で向かった。仙台から1時間ほどで着き、さほど遠いという印象は感じなかった。

東鳴子温泉の率直な感想は、自分が思い描いていた温泉地とは程遠い街並みだということ。街の至る所から湯気が出ていて浴衣姿の人が楽しそうに街を歩いているというのが、漠然とした温泉地のイメージだったが、東鳴子温泉はどこか閑散としていて、温泉地に着いたという実感がなかった。商店街に活気はあまりなく、街全体にどこか寂しさが漂っている気がした。

次に、フィールドワークで行ったインタビュー結果を記載する

・旅館大沼 5代目湯守 大沼伸治さん

お話の中で特に印象的だったのが、「鳴子地域の、旅館・商店・住民同士の仲が良くないので、PRキャンペーン以前に、鳴子の人々が一つになる必要がある」ということだった。不況なので、どうしても皆が「我先に」と考えてしまい、個々で動いていたため街として機能していなかったようだ。そのため、最近の東鳴子のキャンペーンは、皆で町おこしをしようという軸のもとで活動されている。また、来客者の変化としては、東鳴子の特徴である湯治客は全体の10%くらいで、ほとんどの方が1泊2食型だということや、昔に比べ湯治の期間も短くなっている(昔:約1~2週間 現代:約3日間)という消費者の変化が東鳴子温泉に大きな影響を与えたといえるだろう。また、今は泉質ではなく、食事・サービスが重視される風潮にあるという。

・東鳴子温泉利用者 匿名希望 60代男性 3人

昔の湯治は、家族総出で行くものだった。半年に一回の楽しみとして待ち望んでいた。普通の温泉にはあまり行かない。温泉に入るときは、泉質と自分の体のマッチングを考慮する。半自炊のプランで宿泊している(6日間の予定)、普通の宿の食事はカロリーが高すぎるので、半自炊のプランで調整しながら料理を作っている。現在では旅館で出る食事と言うのはどこでも一緒だと思う。

・鳴子温泉郷観光協会 宮本武氏

宮本さんが認識する鳴子温泉の弱みは「客単価の低さ」だという。鳴子で作られている高級茶筒が鳴子のお店、客には売れないため、鳴子では売らずに大分県の由布院温泉で売られているという話を聞いた時は衝撃をうけた。高級温泉地で販売されるほど秀逸な名産物がありながら、「売れない」という理由で他温泉地へ輸出しているのは問題だと思った。また、行政と民間が一体となって地域活性化を行えていないという点も問題だと捉えられていた。その背景として、大崎市は市町村合併したため、行政の事務所が多数あり、どこに決定権があるのかが皆分からず、どこの事務所に行ってもたらい回しにされているという。また、行政は地域活性化のための補助金を協会に渡すだけだという。全体的に、行政の指揮系統が混乱しているように感じた。行政が街の変化に対応しておらずに、民間に任せている部分が多いのだという。また、鳴子の人口形態が変わっているのに、その施策がないということも挙げていた。宮本さんは、街全体が短期的な利益に走ろうとしていて、長期的な展望を持っていないと考えられていた。

・大崎市鳴子総合支所

行政としては鳴子の PR 活動に全く関わっておらず、盛んに行われている PR 活動は全て旅館や商店街などが自主的に行っているものだという。市町村合併後は、行政が主体となって地域活性化や観光 PR に取り組んだことはないそうだ。近年の客足増加は仙台デスティネーションキャンペーンの効果でもあるという。

2 回目 平成 21 (2009) 年 9 月 13~16 日 鳴子温泉郷

2 回目のフィールドワークでは、「現代の湯治を体感すること」を目的とし、旅館大沼で提案している 3 泊 4 日のプチ湯治を体験してきた。旅館大沼の温泉を中心に、一日 3 回入浴をし、鳴子温泉郷の各地の観光名所へと足を運んだ。

湯治の効果は、絶大だった。入浴を繰り返すうちに体温の上昇を感じ、いつまでも保温されているような感覚であった。肌もすべすべになっていることも体現でき、また心が安らぐような気持ちになれた。湯治には、体の内面と外面の双方を癒すということが身を持って証明できた。ただ、3 泊 4 日では少し短かったように感じた。湯治は、体の悪い部分を 1 回外に出してからその後で効果が出ると言われているが、自分は 3 泊 4 日では体の悪い部分が出て終了した。あと少しで効能が得る事が出来たと考えると誠に遺憾である。

食事は半自炊を行い、ごはん味噌汁以外は全て自分たちで料理をした。材料を買い出しに行く際に、どこに何が売っているのか分からなかったり、隣の鳴子温泉まで行ったり(トライクで片道 20 分ほど)と、買い出しに煩わしさを感じてしまった。

鳴子温泉郷の景観はとても素晴らしかった。のんびりとトライクをこぎ、散策に行きながら心が癒されている気がした。湯治は、温泉につかるだけが慰労に繋がるというわけで

はないことが分かった。

4日目では、宮城大学の宮原育子先生のお話を伺うことができた。地域活性化を学ぶものとしての心がけをご教授して下さった。また、地域活性化は問題が複雑に絡み合っている場合が多いということから、問題を一つ一つ解決していくことでより良い地域づくりとなるという。地域づくりにおいて大切なのは、人の意識をどう地域おこしに向けるかということが根幹にあるのだという。地域一体となつての地域づくりの重要性を痛感した。

3.山本信子のフィールドワークの所感

体験内容としては、「湯治」「農業体験」「観光」を主に行つた。

東鳴子温泉で良いと感じたところは、温泉の泉質のよさ・旅館お風呂の清潔感・ネット環境の整備があげられる。湯治を体験する前に、大沼さんより‘温泉の入り方’の講義があり、最初に体の不要物を排出するイメージで、次に温泉の効能を身体に入れていくイメージで入ることを学んだ。そのおかげか、体の芯から温まり、徐々に体温が上昇していくことを感じる事ができた。また、肌が荒れていた部分に改善が見られた。浴室内は、毎日の掃除を通して、清潔感のあり良質の温泉に入ることができた。

また、地域の方々の触れ合いとして、農業体験の際に農地近くの温泉に無料で入れていただいたことができた。そして旅館の女将さんよりお菓子の差し入れをいただいたことで、主観的ではあるが地域の中にはいれた気がして大変嬉しかった。その他に、トライク（三輪自転車）での移動による景観散策は良い運動とリフレッシュになった。交通の便が良くない鳴子温泉地域では、東鳴子温泉から鳴子温泉までの移動もトライクで20分であり、便利であった。皆での半自炊も、一体感が生まれ、大変だが楽しんで行えることがわかった。

考えられる改善点としては、交通の便が悪いこと・温泉の効能泉質が伝わりづらいこと・商店街の活気がないことがあげられる。

1時間に1本間隔の車やバスの移動は、その時間に合わせて動かなければならず、大変不便であった。また、良質で豊富な種類の温泉があるにも関わらず、今入っている温泉の効能や泉質をPRする場が不足していたように感じる。商店街はシャッターを閉めているところが多く、自炊のための食品を買う場所が近くですぐ見つけることができなかつた。

4. 石川健太のフィールドワークの所感

・東鳴子温泉、鳴子温泉

私はオブザーバーとして9月から社会工学研究会に入ったので9月10月の時点でまだ何も鳴子や温泉や湯治についての知識が入ってなかった。だから10月にフィールドワークに行った際の目的は湯治などの知識のない客として鳴子へ行き、客観的に見て感想を述べることであった。

そのフィールドワークの結論から述べれば、鳴子にわざわざ行きたいかというのと、全く行きたいとは思えなかった。なぜならば想像していたものと全く違っていただけだからだ。鳴子や温泉や湯治の知識は温泉情報誌やインターネットを通して入れた程度であった。そこからの情報から私は箱根や草津よりは人は少ないがそれなりには盛り上がっているのだらうと考えていた。しかし、東鳴子温泉に行ったところ、商店街に全く人がいなかった。想像とはまるでかけ離れていて僕は大きな驚きとここまで深刻なのかというショックを感じた。鳴子の現状を肌で感じた。だが悪い所ばかりではない。温泉の種類がたくさんあり、中には150円で温泉に入れる共同風呂もあり温泉を堪能した。また、温泉に入りながら隣で湯に浸かっているおじさんと世間話をし、現地の人と交流を深めることもできた。

■旅館大沼 5代目湯守 大沼さん

鳴子温泉に着いて一通り地域や温泉を見た後に大沼さんに温泉の良さ、湯治の良さ、東鳴子温泉の現状を聞いた。

湯治というのはとてもスピリチュアルなもので地球の中心から湧いてくる地球の凝縮したエネルギーの持つ温泉につかるということは、現代医療の部分的治療とは違い、全身治療をするということだ。また、これをアースヒーリングといい、一晩アースヒーリングをただけでも体が軽くなったり、病気が軽減しているということもある。と話してくれた。この話を聞いた後に、温泉に入ると、自分の意識が変わったので気持ちよく入ることができた。また次の日、寝不足にもかかわらず、体が軽く、まるで熟睡した後のようだった。このことがあり本当に湯治というものが体に良いものなのだと実感できた。

温泉には泉質が11種類あり、鳴子には9種類の泉質がある。泉質によって効能が違い、いろいろな入り方ができる。これが鳴子の強みだと説明されたが、私には泉質の違いや、どの泉質がどの温泉にあるのかわからなかった。せっかくの強みが活かしきれていないように感じた。

全体を通して東鳴子温泉はとてももったいないことをしているように感じた。せっかく温泉というブランドがあるのにそれを活かしきれていない。その結果、顧客が減少していき商店街に活気がなくなり、廃れ、シャッター街になっていくのではないかと考えた。

第5章 提言 —「湯治」にたいするパラダイムシフト—

本論で述べてきた課題に対し、それを解決するべく考案した提案を述べる。

1、温泉 「現代の湯治」をもっと普及させるための提言

これまで湯治とはなにか、湯治をすることによる効果、東鳴子温泉とはどんな温泉地か、東鳴子温泉のよいところ、悪いところについて述べてきた。第五項では東鳴子温泉のスローガンである「現代の湯治」について深くつつこんでみたい。

まず、現代の湯治とはなにか。これは九月十四日の大沼さんへのインタビューの時に大沼さんから聞くことが出来た。大沼さん曰く、単なるスローガンであり、キャッチコピーのようなもの、だそうだ。この話を聞いた時、私自身衝撃を受けたのを覚えている。湯治と現代の湯治の間には何かしら差があって、湯治のよさをさらにパワーアップさせたのが現代の湯治だと思っていたからだ。しかし、この論文を書き進めるにあたって、現代の湯治というのが単なるキャッチコピーで済ませたらいけない言葉であると痛感した。

私（宮城和也）の解釈からすると、「現代の湯治」とはプチ湯治のことであり、これまでの長期滞在型の湯治とは似て非なる湯治である。現代人のニーズにあった、様々なイベント・トライクとよばれる三輪車や田んぼ湯治一があり、短い期間で東鳴子の良さを体感できる湯治なのではないだろうか。しかし、「現代の湯治」をさらに普及させるために必要な事が大きく二つあると思う。一つ目はターゲット設定である。大沼旅館の館長である大沼さんや鳴子観光協会の宮本さんの話を聞いていて、鳴子温泉郷や東鳴子温泉の明確なターゲット設定が出来ていない気がした。現代の湯治をもっと広く浸透させるには、明確なターゲット設定が必要なのではないだろうか。具体的な話をしたら、東鳴子温泉は重曹泉が多く、美容に良いとされる温泉も多い。となると、ターゲットは若い女性であり、私達の年頃の二十代の女性に対するアプローチをかけるべきではないだろうか。

二つ目に必要な事として地域住民と旅行者（湯治客）との交流である。温泉地として成功した温泉として大分の湯布院温泉がある。大分出身の人の話によると、ここには外国人が多く、地元の人と温泉旅館が一体となっている感じがする、と聞く。東鳴子温泉も地域住民を巻き込んだイベントをする必要があると思う。地域の人が温泉と関わりが無い事について、大沼さんにこのような質問をした。「鳴子温泉からトライクで川渡温泉の方に行ったとき、小学生が体育の授業をしていたのですが、ここらへんに住んでいる小学生は温泉を利用するのですか」この質問に対する答えはノーというものだった。もしかしたら旅館は利用しないが、銭湯のような温泉は利用するかもしれない。いずれにせよ、旅館と地域住民が離れていると感じた。

最後にインターゼミの最終プレゼンでも発表した、提案の内容について述べる。いくつかの提案があるが、基本コンセプトは「泉質のよさ、東鳴子のよさを知ってもらう事」と「地域住民と旅館、旅行者及び湯治客を結びつける事」である。

提案内容としては四つある。一つ目が鳴子地域の人による湯治客及び旅行者への講演。二つ目が多摩大学の教員による鳴子地域住民に対する講演。三つ目がインターゼミ東鳴子温泉班による東鳴子温泉周辺の小学校の生徒に対する講演。四つ目が多摩大学インターゼミの鳴子温泉の合宿。これら四つの提案の詳細について説明しようと思う。

まず、一つ目の鳴子地域の人による湯治客及び旅行者への講演という提案だが、これは大沼旅館だけではなく、鳴子御殿湯駅周辺の旅館巻き込んで行うべきである。鳴子の人というのも、鳴子地域の活性化に関わっていない人の講演でもいいかもしれない。この講演に参加する事によって東鳴子温泉はどのような温泉か知れるし、参加者同士のつながりができる。滞在している旅館は違っても、湯治客同士で作った自作料理の交換や鳴子地域の観光情報の共有などで本来の湯治の姿をとりもどすであろう。

二つ目の提案については、多摩大学の教員が鳴子に行って講演する事で、東京までいく手間というのが地元住民にとって省ける。そうすると鳴子地域の価値が上がるのではないだろうか。

三つ目の提案は、多摩大学インターゼミ班が東鳴子温泉の地元小学校の生徒に対して、東鳴子温泉の良さを講演するというものである。そうする事で地元を見直し、鳴子地域の価値向上に伴ってIUターン率も上がるのではないだろうか。

そして上記の三つの提案をインターゼミの合宿でやってしまおうというのが四つ目の提案である。多摩大学のインターゼミ生に東鳴子の良さを知ってもらう事で、新規湯治客にしまおうというわけである。また、東鳴子温泉は肌によい重曹泉が多いので、先に述べた新しいターゲットとしての二十代女性という点でも、この提案は実行した方が良いと思う。以上が「温泉」という視点から見た、東鳴子温泉の活性化案である。

提案としては第一章でも述べたが、「泉質のPR」及び「地域の住民、旅館、観光客をつなぐような提案」をしていく。この二つのコンセプトを元に、東鳴子で多摩大学の教授による講演、インターゼミ東鳴子班による地元小学生への講演、鳴子住民及び旅館主による旅行者への講演、インターゼミの合宿を提案する。各提案の目的や詳細については第一項を参照していただきたい。

2・「医療湯治」を政府政策へ反映させる必要性

湯治は予防医学であるということから、現代人の心身状態とマッチするものであると考える。現代人に多く存在するものとして、「病気と言うわけではないけれど、健康でもない

状態のこと」を表す未病がある。都会で働く人口が増えているため、心も体も疲れている状態であり、未病の人が多くいると考えられる。また、湯治文化を復活させることで、第一次産業従事者を手厚くサポートする体制を整える事で、衰退している第一次産業を活性化することができるだろう。

そこで、湯治文化を政府と共に活性化させることで、湯治だけでなく日本の産業が活気づくと考え、政府制作「医療湯治」を提案する。政府が湯治場への補助金を出し、第一次産業従事者を湯治に足を運びやすくさせる。東鳴子をはじめとする湯治場は補助金を基にコンテンツ制作やPR費に使用することで市場規模の拡大を図る。湯治場が活性化することで、地方の雇用の創出なども見込める。

政府のメリットとしては、湯治文化拡大により医療費の削減が挙げられる。湯治により病気の予防や療養を行えることで、医療需要を低下させ、現代日本が抱えている問題である医師数不足問題への解決策ともなりえるだろう。また、温泉は老若男女問わず好まれることより、政府が湯治を推進することで若者からの高感度が上がることや、湯治場などが存在する地方からの支持が見込めるということも大きなメリットと言える。

市民や第一次産業従事者にとっては、湯治により病気が予防できる。何よりも湯治は金銭的負担が比較的に低いことから、市民にとっても医療費が削減できるといえるだろう。

以上により、政府政策「医療湯治」を提案することで、「医療・介護の再生」や「農林漁業の立て直し」といったマニフェストの実現が可能である。

3・地域と農業

・提案

より地域資源を生かし、地域一体で盛り上げていくために3つの提案を考えた。

1つ目は地域住民への湯治場開放（割引）、2つ目は休耕農地を生かしたグリーンツーリズム、3つ目は大学という外部と連携した「国際交流プロジェクト」を提案する。

1つ目の提案のきっかけは、大沼旅館の館長の話から地元住民が旅館の温泉に入りに行くことはほとんど無いということがあげられたからである。湯治という文化を、地域全体で共有し、盛り上げていく機会として、地元住民への湯治場（温泉）を割引して開放していくということが大切ではないかと考える。

2つ目は、グリーンツーリズムである。東鳴子地域でも行っていたが、できなくなった今、もう一度地域の農業者が立ち上がり、農業体験と美味しく安全な食を通して地域の魅力を発信していく場を持ちたいと考えた。東鳴子温泉地域には、温泉という良質な地域資源があり、「田んぼ湯治」というプログラムを、地域全体で取り組んで行っていくのはどうかと考えた。

最後の3つ目は、総合的ではあるが、東鳴子ゆめ会議と多摩大学が連携して行う、「国際交流プロジェクト」と言うものを提案する。東鳴子地域と、大学との連携プロジェクトで

ある。

東鳴子温泉地域のニーズとして、湯治を PR したい、湯治に適したコンテンツが少ないが上げられ、また国内市場は第一ターゲットであった第一次産業従事者が5%まで減少した今、飽和状態となっている。

そこで、新たな顧客として外国人をターゲットとしてみてはどうだろうか。

また、多摩大学のニーズを大学側、学生側、留学生側から検証していく。多摩大学には現在、中国からの交換留学制度がある。大学側としては、留学生の受け入れ態勢を充実していきたいという思いがある。学生側は留学生との交流の場が少ないという思いがある。そして、留学生としては、日本の文化に触れるきっかけが少なく、活動のフィールドが多摩のみであることや、多摩大学の生徒間の交流の場が少ないことが課題として挙げられる。

東鳴子温泉、多摩大学と双方のニーズがある中、国際交流プロジェクトとして3つのプログラムを提案する。

1つめは、日本文化に触れて学ぶために「留学生と湯治体験」を行う。2つ目は、多摩大学にある既存のコンテンツとして、多摩大学教授陣による「出前授業」を行う。最後に、安心安全な食の提供と文化に触れることから「農業体験」を行う。

以上を行うことにより、東鳴子温泉にとっては、コンテンツが増えること・長期的なイベントが開ける可能性になること・話題性があること・地域間交流がはかれること、そして発展として国際交流がはかれることが期待される。多摩大学としても、留学生と生徒間の交流が図れ、留学生の文化を体験していきたいニーズも満たすことができる。留学生の満足度が上がれば、留学生受入態勢充実につながる。また教授陣にとっても、地域の現状を知れる場でもあり、教授の慰労もかねることができる。

最後に、参考資料として、具体的なプログラム案を記す。

【概要】

年に1度の多摩大学交流イベントとして、
東鳴子温泉の「大沼旅館」に宿泊し、
自然あふれる東鳴子地域で温泉や農業体験、教授による講義、
地元の美味しい食とお酒を通じて
多摩大学間の教授・中国人留学生・学生の親睦を深めると共に、
東鳴子温泉地域の住民と相互の親睦をはかるプラン

【日時】

未定（1泊2日）プチ湯治
※湯治客の少ない時期

【企画内容】

■ 1日目

- 1.東鳴子温泉までバスで移動。（バスで親睦イベントを行う）
- 2.大沼さんによる‘現代の湯治’講義
- 3.湯治体験（1回目）
- 4.夕食 地元住民による郷土料理とおもてなし
- 5.湯治体験（2回目）
- 6.地元住民と教授・中国人留学生・学生との親睦会（飲み会）

■ 2日目

- 7.朝食
 - 8.地域住民との交流 ‘みんなで農業体験’
 - 9.湯治体験（3回目）
 - 10.昼食 取れたて野菜
 - 11.多摩大学教授による講義 一般参加可
（例：久恒先生による「図解講座」 松本先生による「地域活性化講座」等）
 - 12.東鳴子温泉地域の観光 ‘トライク（三輪自転車）’
中国人留学生：茶道体験 in 大沼旅館
 - 13.「東鳴子温泉活性化」に向けて意見交換
（中国人留学生×学生によるプレゼン。
教授・大沼さん・地元住民によるコメント・評価）
 - 14.湯治体験（4回目）
- 解散

【施設】

東鳴子温泉 大沼旅館/各旅館（温泉の泉質の違いを体験）

大沼旅館 山荘「母里乃館」（茶室）

農家

【料理】

住民お手製の郷土料理

地酒 どぶろく・天音等

【企画効果】

【ニーズを満たす】

- 多摩大学の「留学生の受け入れを増やしたい」というニーズを、留学生受け入れ体制の充実をはかることで満たす
- 中国人留学生の「日本文化を知りたい。多摩以外に活動のフィールドを広げたい。多摩大学の学生と交流の場を持ちたい」というニーズを満たす
- 教授の「講義の場を増やしたい」というニーズを満たす
- 東鳴子温泉の「観光客を増やすために温泉以外のコンテンツを増やしたい」ニーズを、多摩大学教授陣の‘講義’というコンテンツによって満たす
- 大沼旅館にとって、「湯治を PR したい」というニーズを満たす
- 湯治客の少ない時期に、温泉を PR できる
- 東鳴子地域間の交流の場が増える（郷土料理作り、農業体験）
- 湯治の良さを再度知れる
- 湯治の理解と体験。泉質の違いを体験する
- 農業体験等を通じて、東鳴子地域住民と多摩大学の親睦を深める
- 「地域交流」「国際交流」

その上で、+α ‘温泉で癒される’

【波及効果】

■広報

- 温泉地域と大学の連携ということで、話題になる
- 学生は感想をブログ・SNS で掲載＝東鳴子温泉の PR
- 中国人留学生が、日本の文化として‘湯治’を広める

■大学

- 多摩大学の留学生受け入れ態勢の充実
- インターゼミの同窓会の場

これまで、「温泉」「観光」「地域と農業」という視点から提案を行ってきたが、私達インターゼミ東鳴子プロジェクトチームの掲げる東鳴子への提言は「湯治に対するパラダイムシフト」である。第1章から第3章までの内容から、東鳴子温泉は何かしらの転換をする必要がある。それら転換の第1歩として私達の提案があるのではないかと思う。

引証資料

【書籍】

- ・松田忠徳『知って楽しむ 松田教授の温泉道』（中西出版，2008,12）
- ・松田忠徳『知るほどハマル！温泉の科学』（技術評論社，2009,7）
- ・山本晃『鳴子温泉案内』（鳴子温泉組合事務所，大正 11）
- ・宮城県鳴子町観光協会『鳴子温泉郷』（宮城県鳴子町観光協会，1980.9）
- ・鳴子町史編纂委員会『鳴子町史』（鳴子町，1974.5-1978.12）
- ・山村振興調査会『山村振興コンサルタント意見書.no.205～239』（山村振興調査会，1975）
- ・全国農業構造改善協会『山村振興コンサルタント意見書.no.384～439』（1981.12-1983.3）
- ・宮城県衛生部『宮城県鳴子町温泉源基盤整備調査報告書』（1975）
- ・温泉地域研究『宮城県東鳴子温泉における湯治場の地域変容と活性化3号』11～18頁。
- ・『シンポジウム 鳴子温泉郷における湯治の現状とあり方』
- ・『米を、あきらめない---宮城県大崎市・鳴子温泉郷（特集 先頭に立った市町村 格差なんて吹き飛ばせ）』

【WEB】

- ・鳴子温泉郷における湯治客の地域的特性平成9（1997）出展：千葉大学教育学部研究紀要. 第1部 Part I 26 pp.245-256（参照日：2009年12月26日）
- ・構造開発特別区域計画
出展：<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kouzou2/kouhyou/040621/dai5/08toke.pdf>
（参照日：2009年12月26日）
- ・湯治と農山村の資源を活かした地域再生の取り組み～現代版湯治 鳴子スタイル～
出典：<http://www.mlit.go.jp/common/000023157.pdf>（参照日：2009年12月26日）
- ・鳴子温泉郷ツーリズム「鳴子スタイル」（宮城県大崎市）
出典：<http://www.narukostyle.com/>（参照日：2009年12月26日）
- ・温泉地の旅館経営における二つの方向性——＜資本力＞と＜おもてなし＞の複合因果に関する計量分析——
出典：<http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/kiyou/kiyous/kiyous-38-2/image/kiyous-38-2-107to128.pdf>（参照日：2009年12月26日）
- ・広域関東圏産業活性化センター
出典：<http://www.giac.or.jp/>（参照日：2009年12月26日）
- 事例①地域におけるものづくり支援機関のあり方に関する調査
- 事例②神奈川県森林地域振興調査事業
- 事例③大学の地域貢献を考える
- 事例④地域活性化における交通コミュニティ増加
- 事例⑤赤城村地域産業地場育成

事例⑥観光を軸とした地域観光産業育成

事例⑦地域メディアを通じた地域振興

・過疎地域自立促進方針 宮城県（平成 18 年度 3 月）

出典：（参照日：2009 年 12 月 26 日）

・東鳴子温泉における小規模旅館の経営動向 浦達雄（2006）

出典：（参照日：2009 年 12 月 26 日）

・「たび」を意識した地域づくり ～観光による地域活性化事例研究～ 清水慎一・小林裕和（2006） 日本観光研究学会第 21 回

出典：（参照日：2009 年 12 月 26 日）

・動的な生態観光系としての温泉地におけるマーケティング戦略
～山形県小野川温泉を事例として～ 小林裕和（2002）

出典：（参照日：2009 年 12 月 26 日）

・観光庁

出典：<http://www.mlit.go.jp/kankocho/>（参照日：2009 年 12 月 26 日）

・東鳴子温泉・東鳴子ゆめ会議

出典：<http://koiyade.gozaru.jp/>（参照日：2009 年 12 月 26 日）

・鳴子温泉郷ツーリズム

出典：<http://www.narukostyle.com/index.html>（参照日：2009 年 12 月 26 日）

・社団法人日本観光協会

出典：<http://www.nihon-kankou.or.jp/home/index.html>（参照日：2009 年 12 月 26 日）

・東鳴子温泉 旅館大沼

出典：<http://www.ohnuma.co.jp/>（参照日：2009 年 12 月 26 日）

・民主党マニフェスト（2009）

http://www.dpj.or.jp/special/manifesto2009/pdf/manifesto_2009.pdf

【雑誌】

東洋経済新報社『特集ニッポンの食と農業』東洋経済新報社 166 頁（2009 年）

フィールドワーク

東鳴子温泉（阿部 2 回、宮城・山本・石川・久恒 1 回）

鳴子温泉（阿部 2 回、宮城・山本・石川 1 回）

川渡温泉（阿部・宮城・山本 1 回） ・鬼首温泉（同）

中山平温泉（同）

天然温泉いこいの湯（阿部・宮城・山本・久恒 1 回）

箱根温泉（阿部・山本・久恒 1 回）

平湯温泉（山本 1 回）

謝辞

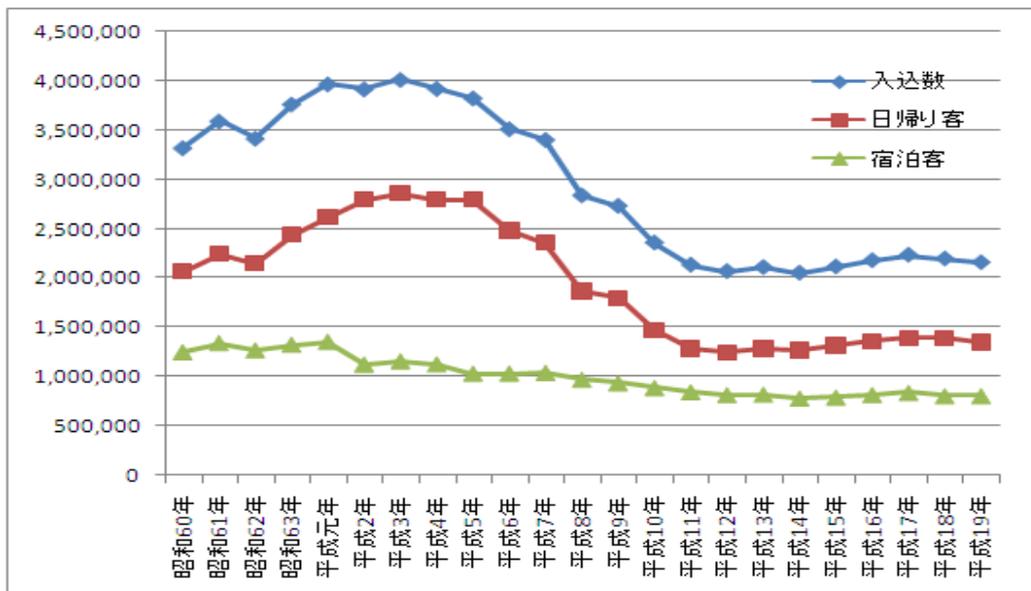
本研究に際して、様々なご指導を頂きました寺島実郎学長、久恒教授に深謝いたします。

また、フィールドワークの際お忙しい中多くのご指摘を下さいました、大沼伸治様（大沼旅館館長）、宮本武様（たまごや店長）、宮原育子様（宮城大学教授）、宮城大学の学生の皆さんに感謝いたします。

論文作成にあたり、ご協力頂いた多くの方々に、厚く御礼申し上げます。そして最後に、宮城大学の宮原育子先生からご教授いただいたお言葉にてこの論文を締め括りたい。

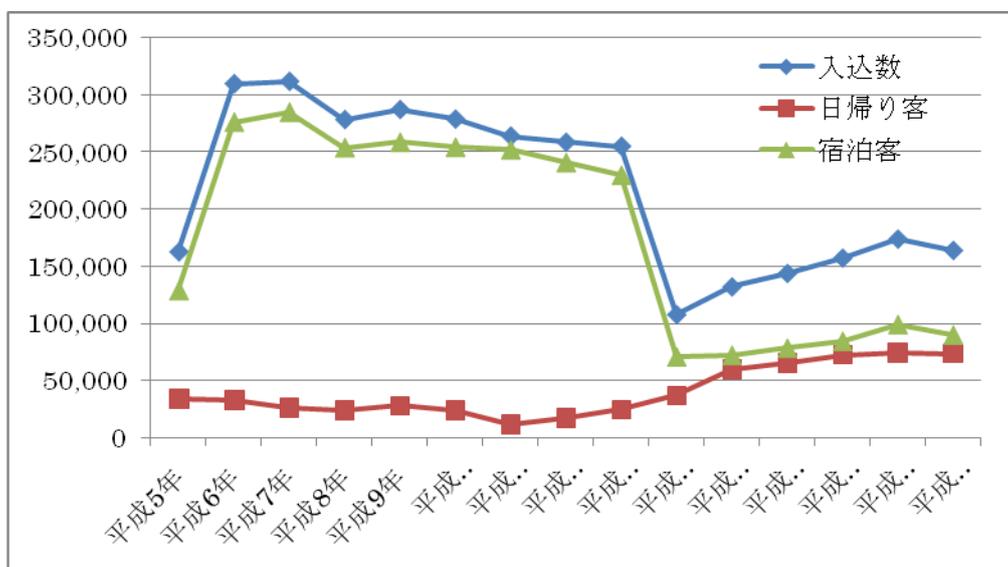
「地域を研究するに当たり、心掛けなければいけないことは【地域を想う心】と【地域を忘れないこと】の2つである。」

図1 鳴子温泉郷の客足数推移



平成 19 (2007) 年 宮城県経済商工観光部観光課調べ

図2 東鳴子温泉の客足数推移



平成 19 (2007) 年 宮城県経済商工観光部観光課調べ

図3 鳴子温泉郷の宿泊施設数推移

	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17	平成18
宿泊施設数	130	128	128	125	123	123	123	123	125	98	97

平成 19 (2007) 年 宮城県経済商工観光部観光課調べ